

宮城)心も満たす「子ども食堂」 県内でも広まり

中林加南子 2016年6月10日03時00分



翌日は運動会。「ドリーム子ども食堂」でしっかり食べて力をたくわえた=仙台市青葉区

みんなで食べておなかも心もいっぱいに——。子どもたちが無料や少額で食事をとれる「子ども食堂」が昨秋以降、県内でも増えている。子どもや母親の居場所づくりの取り組みを、多くの人が支えている。

5月20日午後5時過ぎ、仙台市青葉区のJR愛子駅近くにあるマンションの一室に、地域の小学生16人が集まった。「ドリーム子ども食堂」開店の時間だ。

子どもたちも配膳を手伝い、ハンバーグとサラダ、たけのこごはん、おみそ汁が並んだ。「いただきます!」。おしゃべりに夢中で箸が進まない子、ハンバーグをほおぼる子。みんな次々にお代わりし、6合のご飯があっという間になくなった。

4年生の安田凌太君(9)は「大勢で食べるのは楽しい」。ここで仲良くなった別の小学校の友だちと「次の子ども食堂で!」とハイタッチをし、迎えに来たお母さんと家に帰った。

食堂は、地域で民間の学童保育を開く「ドリームクラブ」が4月に始めた。代表で、音楽教室を運営する太田瑞世さん(52)は、仕事に家事にと忙しい母親たちの姿を見てきた。「みんなで一緒に食べるのは楽しそう。お母さんたちにも少しゆっくりできる時間を」との思いだった。

月に1回で、食事代は無料。米や野菜は知人からの提供で、クラブを利用する保護者らが調理する。友だちを連れてきたり、「ふだん食べない食材が食べられた」という子がいたり。太田さんの願い通り、「楽しい場所」になっている。

仙台市では同じく4月、子ども支援などにかかわる有志が「せんだい子ども食堂」を始めた。代表の門間尚子さん(47)の呼びかけに、管理栄養士や母子支援に取り組む専門家ら20人ほどがすぐに集まった。隔週日曜の開催で保護者も参加する。子どもや自身のことで話が弾む姿に「お母さんたちの居場所にもなっています」。

門間さんの元には、県内外から「食堂をやりたい」「寄付したい」といった問い合わせが相次ぎ、8月にはノウハウを伝える講座を開く予定だ。教育支援をするNPO法人「アスイク」

(仙台市)も今月、多賀城市内で食堂をオープンさせた。「温かくてわいわいできる場所を提供します」と利用を呼びかける。

■活動 地域も後押し

県内で初めて本格的に食堂を始めたのは、石巻市で学習支援に取り組むNPO法人「TED I C」。地域の活動でつながりがあった石巻・貞山地区で昨年11月から、月に1回程度開いている。門馬優代表(27)が、一人でご飯を食べる子や「おやつが食事」という子がいることに気付いたのがきっかけだった。

活動を地域も後押しする。調理を手伝う近所の人がいっしょに食卓を囲み、貞山小学校では校内でチラシを配って参加を呼びかける。TED I Cの学生ボランティアも参加する。

村石好男校長は「子どもには昼間以外の居場所も必要だが、学校だけでは手が届かない。いろんな世代と話す子どもたちは、精神的に安定するということもあるようです」と話す。

行政も支援の動きを見せている。県は「子どもの貧困対策にもつながる」として、今年度予算に50万円を計上した。どんな支援ができるかを検討していく。(中林加南子)

朝日新聞デジタルに掲載の記事・写真の無断転載を禁じます。すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

Copyright © The Asahi Shimbun Company. All rights reserved. No reproduction or republication without written permission.